

『ルームメイトの溺愛レッスン』

著：切江真琴

ill：篠崎マイ

「春人くんは明日もなんか仕上げないとならないのあるんでしょ？ 俺休みだし、食事とかやるよ」

「あ、それは嬉しいかも。昼夜逆転直そうとして昼間に集中するようにしたら昼ごはん作るの億劫になっちゃって。それでカップ麺とかばかりだったんだ」

「う……ごめん、俺の食事作りってパスタにレトルトソースかけるくらいです」

カップ麺とあんまり変わらないかも、としょんぼり告げると、春人は「じゃあ手順みつつくらいですむ超簡単なパスタソースの作り方教えるんで、それ作ってください」とにっこりした。トマトの缶詰を使うとお手軽にパスタソースが作れるらしいのだが、煮詰めるのを監視しなくてはならないので仕事に集中できないのだそうだ。

クリエイターと料理というのは相性がいいのだろうか。この一週間で作ってもらった食事を思い出すに、春人はかなりの料理好きだ。司の担当作家にも、締め切り明けに何を作ろうか考えるのが楽しい、なんていう人がいる。

なんだか興味を惹かれ、司はそんな話をしながらそうめんを完食した。

「あーおいしかった。俺、そうめんとトマトがこんなに合うと思わなかった」

「結構さっぱりしてていけるよね」

「うんうん。春人くんすごい。なんかいつも作らせちゃって悪いなあって思うんだけど、うち帰ってできたてのおいしいごはんあるとなんか違うんだよなあ。今忙しいけどいつもより消耗してない気がする」

正直な気持ちを言葉にすると、嬉しいなあ、と春人は甘く微笑んだ。

「司さん喜んでくれるから、作り甲斐があるんだよね。何でもしてあげたくなっちゃう」

「そりゃ喜ぶに決まってるって。ほんと、こんな夜ににこにこごはん用意してくれるなんて母親でも無理だよ。あんまり人がいいと、春人くん俺に利用されまくるよ？」

初対面の日、『悪い大人に餌食にされる』なんてからかわれたお返しをすると、それに気づいたのか春人は楽しそうな顔をして顎を撫でた。

「別に、人がいいわけじゃないです。誰にでもやってあげるわけじゃないからね？」

「そ……そうなんだ」

司が特別待遇です、と言うようにちらりと流し見られ、ついどきりとしてしまう。また、からかわれたのかもしれない。年上の威厳とは、と内心悩みつつ司は酒に口をつけた。

「実はね。ルームシェアの話を受けたのは、司さんだからってのもあるんだよね。前からきれいな顔してるなーって思ってたから」

酔いのせいなのか、どこかまるやかな口ぶりで呟かれ、飲みかけの酒でむせそうになった。春人とは少し話したことがあったのは確かだけれど、自分の側しか覚えていないと思っていた。なのに個人識別されていた上きれいともまで言われては、酒を嘔き出しそうになっても仕方ないというものだ。

司の反応を見て、やばい人と誤解されたとでも思ったか、「あ、変な意味じゃなくて」と春人が手を振る。

「どうせ一緒に住むならきれいな方がいいって言うか……ってのもあれだなあ。なんかね、目が大きくて、髪も染めてなさそうなきれいな茶髪で、なんていうかお人形系の整った顔立ちなのに、歩くと髪が毛びよびよしてそのギャップにやられたというか」

「結局それ、顔じゃなくて間抜けさがいいってことでは……」

「僕は間抜けとまでは言ってないのに」

無然と突っ込んだ司に、春人は朗らかに笑った。

「あと司さんは覚えてないかもしれないけど、春頃に僕、怒られたんですよ。自販機で」

「……え？ 俺が、怒ったの？ 春人くんを？」

全然心当たりがない。春人は「あ、気づいてない、やった」となぜか楽しそうだ。

「怒るっていうより叱るの方が正しいかなあ。僕ね、ちょっと花粉症気味で春先は眼鏡とマスク必須なんだけど、三月頃、月刊オータムの編集部で顔出したあと廊下の端の自販機行ったんですよ」

月刊オータムは司の出版社のサブカル系青年漫画誌だ。近年売り上げをぐいぐい伸ばしてきていて、そのコミックスの装丁を春人はよく手がけている。

「ちょっと待って……廊下端の自販機で、眼鏡とマスク？」

「あ。思い出しました？」

にこにこして春人が司を覗き込んでくる。うわあ、と司は両手で顔を覆った。

たしかに春先、マスク着用の青年に会った。自販機の下を覗き込んでいたので何をしているのか尋ねると、五百円玉が自販機の下に入ってしまったのだが取れないので諦める、というのだ。十円二十円ならまだしも、五百円玉を諦めるとは何事かと叱り、司は自分のデスクから定規と両面テープを持ってきて無事五百円玉を保護したのである。

「だって大きいバッグ持ってたから持ち込みに来た漫画家志望の子だと思ったんだよ……！」

「ああ、だから『五百円あったら特売のカップ麺が五個は買えるでしょ!?!』って言ってたんだ」

漫画を描くというのはなんだかんだで時間を食うためバイト時間なども限られ、どうしても金銭的に逼迫する部分も出てくるのである。そんな、漫画家志望者を思っていたことだった。

しかし。五百円を笑うものは五百円に泣く、と昔ながらの格言をとうとうと説きまくった相手は実はすでにデザイナーとして個人事務所を立ち上げていた春人だったとは。

あゝあゝあゝ、と濁点つきの呻きをあげてテーブルに突っ伏す司の頭を、春人はよしよしとやさしく撫でて「司さんの、漫画家さんに対する真剣なとこ、僕は好きだなあ」などと慰めてくれた。

「でも春人くん、あのときデザイナーですって言ってくれたらよかったのに……」

「まさか持ち込みと間違えられてるとは思わなかったから、素直に謝ったんですよ」

ふふふ、と楽しげに春人は目を細めた。

「ちょっと、司さんみたいなきれいなタイプに怒られたのも楽しかったし」

「それはなんかちょっとMっぽくて危ない」

「Mではないんだけどなあ。あ、そういえば僕、少女漫画家さんは若い頃デビューして恋とかできないまま仕事漬けになるから、作家さんに夢を与えるために少女漫画の編集さんはイケメンが多いって聞いて

てたんだよね」

「またもや司は酒を危うく嘔き出しそうになる。」

「なにそれ……っ」

「いやあ、なんか昔聞いたことがあって。で、司さんてば天然茶髪であまーい感じの、まさに漫画に出てくるようなきれい系おにいさんだったから、あーあの噂ほんとだったー、って」

「うちの編集部、七割女の人だよ？」

「そうなんですよねえ。編集長なんかイケメンてより悪代官みたいだしね」

「ぶっふ」

ド近眼のため目を眇めるくせのある編集長は、内面は少女漫画をこよなく愛する壮年のおにいさんなのだが、四角い輪郭とあいまってたしかに悪役面ではある。そのギャップがいいのだと弁護してみるも笑いを我慢しきれず、司は盛大にむせてしまった。

「大丈夫？」

「っ……春人くん、あんまり笑わすようなこと言わないで……っ」

「あ、ごめん、僕のせいかな」

あはは、と朗らかに笑うイケメンは、水を差し出してくれはするものあんまり反省していないのか、楽しそう。細めた目が面白いものを見つめるときのようなきらきら感に溢れている。

「——ちょっと子供みたいなんだよなあ。」

いつも上機嫌そうな明るい表情で、たまに司をからかってきたりする。おかげでこちらも無駄な遠慮はしなくてすむので、一緒にいてとても気楽で過ごしやすい。

「締め切りもうすぐなんですっけ。そろそろ終電やばくなったりする？」

「えーと、校了は再来週のまんなか予定、かな。タク帰りになるのはもうちょい先のはず」

「まだ追い込み時期じゃなかったんだ。なんか疲れてそうに見えるなーと思って」

「あー……それは、うん」

まだ一緒に暮らして一週間だというのに顔色を読まれてしまったと、司は苦笑した。

校了日より少し早めに作家たちへの最終締め切りは通達されている。その締め切りが近くなってくると、じわじわと予定スケジュールの狂いだした作家たちからのヘルプコールがくるようになる。

今担当している三人はみな、ギリギリまで頑張るタイプではなく、先のことを考えて早めに連絡してくるタイプなので、ある意味仕切り直ししやすいのが幸いだ。とりあえず進行状況を聞いて再度締め切りを設定し直したり、場合によっては臨時アシスタントの手配をしたりすることになる。早め早めの『報・連・相』は非常に大事なあと、松江が担当しているギリギリ爆発作家を見ていると思う。

ほかに、直近の発売号の仕事と並行し、その次の号の企画だの読み切りだの季刊別冊についての会議だのとやることは色々ある。そんなふうに諸々やることは詰まっているのだが、毎月のことなので疲れるといっても想定の範囲内ではある。

実のところ司を消耗させているのは『いちゃいちゃシチュひねり出し指令』だった。春人との接触をアレンジしたエピソードのほかは、いい感じのものが全然浮かんで来ない。自分が出した指令というのがこれまた皮肉だ。

ネタ出しは、割合は違えど作家と編集の二人三脚でしていくものだが、デスクに向かってするような作業でもない。むしろ常に頭の中に悩みが浮遊している状態に近いので、司のようなタイプだと「どうしよう」という気持ちが顔にもろに表れてしまう。

「企業秘密？」

言い淀んだ司の様子を見てか、なら聞かない方がいいか、と春人がひとり言のように言う。

「あ、全然、秘密ってわけじゃなくて。……いちゃいちゃシチュエーションのネタ出しに悩んでるというか。まあそれは作家さんもだから俺ばかり大変なわけじゃないんだけど」

「いちゃいちゃ……？ フェリシアって過激系少女漫画じゃなかったよね？」

「ちっちゃがう、全然違います。いちゃいちゃっていうとあれだけど、まあちょっとした触れ合い的なのできゅんとするシチュというか。端から見たら『いちゃいちゃしてんじゃねーよ！』って突っ込みたくなるような甘酸っぱいやつというか」

「ああ、醤油取ろうとして手が重なっちゃってキャッみたいなやつ？」

「そう、そういうやつ」

司の『図書館で本をとろうとして云々』と同レベルの喩え話に思わず笑ってしまう。

「それなら別に、難しく考えることもなさそうだけど」

「なのかなあ」

姉と母の蔵書している少女漫画で育ったため、司は少年漫画よりも少女漫画の方に馴染みがある。そういった意味ではこの編集部配属されたことは天の配剤といえるのだが、逆に言うと少女漫画のセオリーをよく知っているせいで、どんなシチュエーションも「あるある過ぎる」となってしまう部分があるのだ。

そんな話をすると、春人は食器を脇に避けたテーブルの上に、片肘をついて頬杖した。

「うーん。少女漫画って結局、シチュエーションそのものもだけど、その作家さんの絵とか空気感とかそういうのが少女たちの胸キュンを引き出してるんだと思うんだよね」

「あー。そういうのはあるかもねえ。でも、似たようなシチュだとどうしても見たことある一つてなるじゃない？」

「そうかなあ。漫画に限らずリアルでも、似たようなシチュなのに新たな気持ちが芽生えるってあると思うけど」

さらりとリアル恋愛に比して言うあたり、やはりイケメンは違うと思う。

「うあーそれすごいモテ男って感じの感想だよな！ 松江さんが言ってた通りだよ」

「ええ？ 僕、もてないですよ。すごいめんどくさがりだしコミュ障だし」

「コミュ障は絶対ない」

強く否定すると春人は「ほんとなのになあ」と苦笑した。

「まあなんていうか、読者的には主人公の感じ方が伝わると思うから、シチュエーション以外の部分で盛り上げてくと似た場面を知ってても新鮮に楽しめるんじゃないかなーとか」

「……難しいなー」

たぶん物語作りのすべてに通じていることを春人は言っているのだが、実践するのは言うほど簡単ではないわけで、悩みは余計深くなる。難しい顔をした司の前で、春人は「そうだなあ」と呟いた。そし

て、何か思いついたかのように、司の前に手のひらをかざして言った。

「僕の手、褒めてみて」

「.....褒め？」

「うん。少女の気分で」

「えええ」

いきなりのお題に困惑しつつ、司は目の前にやわらかく広げられた手を眺めた。

「大きくて、あったかそう。.....厚みがあって、自分とは違うなーと思う」

「それから？」

「うんと.....指が長くて器用。料理がうまい。あ、絵も描ける」

「それで？」

「う。うう.....生命線が長い」

ぷっと春人が噴き出すので司も一緒になって笑ってしまう。

けれど、なんでこんなことを、と春人を窺うと、微笑んで細くなった甘ったるい焦げ茶の瞳は、じっと司を見つめていた。胸の中がにわかに落ち着かなくなる。

「さわられたらどんな感じすると思う？」

「さわ.....」

ずきゅ、と心臓が跳ね上がった。それと同時に、大きく厚みのある、器用な指を持つ手が伸びてきたかと思うと――司の頭を、そっと撫でた。

「かわいいね、司さん」

「.....っ」

ぼんと爆発するような勢いで顔が熱くなった。

絶句する司を、「ね？」と春人が窺うように見る。

「いきなり撫でられるより、モノローグとかで手に注目してからの撫で、だと結構盛り上がり違う気がしますませんか？」

司に触れた手をさらりと戻して、春人が邪気のない笑みで問うてくる。ぎこちなく頷きながら同意を示すと、「まあ僕は素人なんでの的外れかもしれないけど」と続けた。

「好きな人のことって、特別な何かじゃなくても見入っちゃったりするよね、って」

「.....たしかに、好きな人のことって女子はよく見てる、かも」

「でしょ。片思いなんかだと特にみんなにバレバレなんだよね。高校の頃、部活で本人たちだけ気づいてないってことがあって、みんなでこっそり応援してたなあ。来月とうとうそのふたりが結婚することになって、呼ばれてるんだけどね」

「高校生のときからつきあって結婚、ってリアルでもあるんだ.....！」

「ありますねえ。――どうかな？ 結構役に立った？」

にっこりと、春人が尋ねてくる。褒めて、というように瞳が期待できらきらしていてなんだかかわいい。

――なんかほんと、いい人だよなあ.....

松江の、いちゃいちゃ実践してもらえば、という提案が脳裏をひらひら飛んでいる。バカな案だと思

うのに振り払えないのは、頭で場面だけを考えるよりもずっと、今の実験でドキドキしたからだ。シチュエーションがよくあるものでも、感情が伴えば新しいときめきになるという春人の言葉の意味がよくわかった。

それらのことが司のもろい理性を突き崩し、強く後押ししてくる。たぶん、言えば春人は相手をしてくれる。

しかし、自制心は「ダメだ」と必死に抵抗を見せている。

だって、胸はさっきからずっと甘く疼きっぱなしだ。こんなことがずっと続くのはダメだ、心が絶対に勘違いしてしまう。

そうは思うのだけれど。

「あの」

心が決まりきらないまま、司は視線をうろうろさまよわせながら口火を切った。

「……春人くんが、嫌じゃなかったら……いちゃいちゃシチュの、ネタを……実践してほしいんだけど」

春人の顔を見ずに言い切って、しばし待つ。返事がなかなか来なくて、自制心を振り切って馬鹿なことを頼んでしまったと後悔する。

たまらず視線を上げた先には、目を丸くしている春人の顔があった。

「今みたいに、ってこと？」

驚いてはいるようだけれど、その目に嫌悪感のようなものは見られない。それだけで司はほっとする。

小さく頷くと、春人はえらく楽しそうにゆっくり口角を上げ「いいよ」と承諾してくれた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>